

『方便から眞実へ　浄土真宗』より抜粋

197 疑いとはどんなものですか

解説 || 真宗では、どんなのを疑いというのか知らないのです。私は疑つていないとえは、疑わないように思つていますが、晴れていなければ疑つているのです。往生ほどの一大事、地位も名譽も財産もすべての物を捨てて、次の世界にでて行くのですが、気にかかりませんか。あなたは魂の行き先の不安はありませんか。こんな心がでて行くとすれば、どんな世界に行くだろうかの不安はありませんか。気にかかるいのは安心しているからではなく、無頓着なのですよ。親さまに任したのではなく、やりつ放しで自分に対して忠実でないのですよ。親さまが御承知、親さまに逢いましたか、我能く汝を護らんとおっしゃるから、仏さまの仰せには間違ひはない、結構でございますね。感情は調子を合わしていますが、あなたの大秘密の部屋の自性はうんともすんともいっていませんよ。後生が一大事にならねば、その

機は出ませんよ、これをお助けくださるとは聞いているが、本当に助かるのであろうかと心配はありませんか、気にかかりませんか。

ある処に他人を指導していた同行が、臨終間際になつて赤鬼が出た、青鬼が出たと大騒動を始めました。ある人は仕事に追い立てられて、後生とも菩提とも思わなかつたが、臨終間際の恐ろしさ、この世の物は何にも間に合わない、何で元気な間に求道しておかなかつたかと後悔した人がいましたよ。気のついたのはよい方です。衆苦に攻め立てられて冥から冥に流転するのです。

一代の間に万億の財を積んだ高利貸しが、家内と子供に分配したとき、長男が泣きました。

「なぜ泣くか、俺の分配の仕方が悪いから泣くか」「お父さん、裸体で生まれた者が、こんなに財産をもらつて何の不足がありましようか」「不足がなければ泣くな」「お父さん、財産は分配してもらつたが、欲の塊の業は誰が荷つてくれるのですか、お父さん一人で苦しまね

ばならないではないか」といつたとき、静かに考へていた父が、「俺は大抵抜け目のない男と思つていたが、一番大事な俺のことを忘れていた。早く坊さんを呼んでくれ」といつたそですが、人間は阿呆鳥ですよ。インドは昼は暑いから、阿呆鳥が餌を探しまわつてはいるが、巣がないから夜が寒い、一晩中巣を造ろう、巣をつくろうと鳴いてはいる。朝になると昨晩のことは忘れて、餌を拾うことに現を抜かして飛び歩いている。人間も同様です。金儲け金もうけと、来る日も来る日も追い立てられ、妻が死んだ、子供が死んだ、巣をつく巣をつくろう、未来の用意をしなければと一時はあわてるけれども、後妻をもらつた、子供が生まれた、遊んではおられない、金儲け金もうけと騒いでいる。また逆縁に出逢うと、巣をつく巣をつくろう巣をつくろうと繰り返してはいるが、なぜ真剣に驚かないのでしょうか。真剣に行き先を考えると、必ず不安が出る、不安が出ると疑いはつきものです。それが気にかかるないといふのは、無知なのですよ。

真宗の疑いとは、私は疑うてはいないという簡単な疑いではなく、晴れていのを疑うてはいるのです。

一口にいえば、二種深心が徹底していなければ、みな疑いの域を離れてはいないのです。いくら素直な真似をしていても、自力の機執が離れていなければ任してはいないのですから、何とかなろうという自惚れがあります。自惚れがある間は投げだしていいから、本願に乗托してはいません。出離の縁あることなし、地獄は一定住家ぞかし、と切り堕とされた人でなければ、摄取された不思議の境地は諦得されてしまい、不思議の境地を諦得していなければ、明信仏智にはなりません。明信仏智でなければ疑惑仏智です。不了仏智です。一念の関所を越したときでなければ、疑惑は離れてはいません。疑いなく墮ちた人でなければ、疑いなく助かつたという自覚はありません。これを蓮師は「露塵ほども疑いなければ」と仰せられたので、疑いは信仰の入り口で出るものではありません。永年説教を聞かしてい

ただいて嘘とは思わないが、これでよからうかと心配が出たのを疑いというのです。

誰も本願の名号に向いて、危ぶみ疑う者はいませんが、機を見るとき、どうもはつきりせん、これでよいかしら、ああはおつしやるけれども、ひよつと墮ちはせぬかと心配があれば、みな疑いの煩惱です。あの心は、三毒の煩惱とは違います。あのひよつと墮ちはせぬかの煩惱のある間は、救われてはいません、攝取されてはいません。だから布教する者が、機を見るな、機を見るものは異安心だと威して、機に蓋をして浄土に辻り込もうとしていますが、それはずるい誤魔化しでありますから、救われてはいません。

鏡に向けば姿は見える、法に向いたら機が照らし出されて見えなければ、機の深心にはなりません。機の深心になつていなければ、法の深心にもなつていません。機法合体の曖昧な信仰から、晴れたのやら暮れたのやらわからないから、いつとはなしのお助けと調熟の光明に腰を掛けているのです。

必死で前進しなければ、二種深心の徹底した明信仮智の境地に入ることはできません。徹底しない信仰の人を、疑惑の人というのです。

198 自力の心のある間は不安がある、不安の心を疑いというのですが、自力と疑いとどちらが先につきるのでですか。

解説＝自力の心というのは、私が知らしていただいたのが前に並べた五つでありますが、皆さんどれでも、あなたの心を突いて見れば、なるほどいるなあということがわかるでしょう。あれがつきたとき、同時に疑いは晴れるのですよ。

蓮師も「もうもうの雑行雑修自力の心をふり捨てて」とおっしゃつてあります。が、疑いを捨てよとは書いてありません。自力が捨てたったときには、疑いは晴れているのです。自分の

計らいの心が自力です。計らいがつきて親に計らわれていたときは、他力に生かされているのですから、疑いは晴れて明信仏智になっています。明信仏智にならない前を疑惑仏智というのです。その関所を「一念の信定まらん輩は」というので、そこで信前信後の水際が立ち、真仮の分際を鮮やかに諦得さしていただくのです。そのときが、二種深心が徹底したというのです。

いわば、自力と疑いとは不即不離で、自力の正体がある間は疑いの影があり、疑いの影のなくなつたということは、自力の正体が浄尽したということですから、自力の心を振り捨ててといわれたので、正体の自力が捨てたら疑いの影はなくなるのです。

他力の光がついたと同時に、暗い影は消えるのです。自力がつきたとき疑いは晴れるのです。私は自力を発したことはないという人は、他力に生かされていないのです。私は疑うたことはないという人は、晴れた人ではありません。当たらず触らずの腫物に触るような、あ

やふやな信仰は無力です。大千世界に満てん火をも過ぎ行きて聞く必死の求道が、絶対の悪を知らされて、絶対の善の名号と一体にさしていただき、捨身の報謝をさせていただくのです。